

人文社会科学研究科（産業システム創成専攻／経済・経営コース）アセスメントプラン

1 アセスメントの目的

学生や社会の状況を捉え、データに基づくカリキュラムおよび個々の授業、そして学習支援の改善を継続的に行うことを目的として、学修成果のアセスメントを行う。アセスメントにあたっては、直接評価と間接評価の双方を取り入れる。前者については成績や学籍異動の状況に関するデータを収集し、後者については全学生に対して毎年実施するアンケートを中心にデータを収集する。アンケートについては縦断的な調査を行うことにより、総体としての学生の状況だけでなく個々の学生における能力や学習状況の変化を追跡する。これにより、個々の学生に対する学習支援の改善を行う。さらに、成績評価の結果や学籍異動の状況に関するデータと併せて分析することで、休学・中退や成績不振の予測などへの活用を図る。

2 達成すべき質的水準

達成すべき質的水準は、人文社会科学研究科産業システム創成専攻のディプロマ・ポリシーにおいて定めている。ディプロマ・ポリシーにおいては、「経済・経営学の高度な専門知識と経済・産業社会の諸課題の本質を理解する能力」「課題発見力と実践的研究の遂行能力」「コミュニケーション能力とリーダーシップ」「情報分析力・発信力」「新たな価値創造を主体的に導く能力と姿勢」を身につけることを期待している。修士論文においては、「問題意識」「分析手法」「論理展開」「根拠資料」「有効性」「論述形式」等といった基準を満たすものについて合格と判定している。加えて「修士論文ルーブリック」において15の観点のうち全てにおいて、2段階以上（3段階中）に到達することを目標としている。

3 アセスメントの方法

No.	名称	時期・頻度	学年	主な質問項目、内容等	手法	実施責任部署	結果の活用方法
1	修了予定者アンケート	毎年1-3月	M2	DP達成状況、愛大学生コンピテンシーの習得状況	Webアンケート	教育・学生支援機構	教育・学生支援機構が教育学生支援会議に報告し、研究科のカリキュラム改善、学習支援や学習環境の充実、自己点検・評価、情報公開に活用。
2	学期末アンケート	毎年学期末	M1/M2	学習行動、授業・カリキュラム満足度	Webアンケート	産業システム創成専攻学務委員会	専攻の授業方法やカリキュラム改善、学習支援や学習環境の充実、自己点検・評価、情報公開に活用。
3	成績不振学生の調査	毎年2回	M1/M2	学業不振の状況（GPA、修得単位数、休学者数）	修学支援システム	教育・学生支援機構／法文学部および社会共創学部チーム	各研究科が教育学生支援会議に報告し、各専攻の学習支援の改善、カリキュラム改善、自己点検・評価に活用。
4	休退学調査	毎年1回	M1/M2	休学者数、退学者数	修学支援システム	教育・学生支援機構／法文学部および社会共創学部チーム	各研究科が教育学生支援会議に報告し、各専攻の学習支援の改善、カリキュラム改善、自己点検・評価に活用。
5	修了者の進路状況	毎年1回	M2	修了者の進路（就職率、県内就職率、進学率）、就職支援への評価	修学支援システム	教育・学生支援機構	教育・学生支援機構が教育学生支援会議に報告し、就職支援の充実、自己点検・評価、情報公開に活用。
6	学修ポートフォリオ（eCrip）	毎年2回	M1/M2	各DP達成度の自己評価や改善すべき課題	eCrip	産業システム創成専攻学務委員会	eCripへの入力状況や、DPに示されている各分野の達成度を検証し、学習支援およびカリキュラムの改善、自己点検・評価に活用。
7	授業評価アンケート（専攻が指定する科目について実施）	毎年	M1/M2	学習成果についての設問	修学支援システム	産業システム創成専攻学務委員会	教員は学生アンケート結果をフィードバックする。また、授業改善のための参考資料とする。
8	就職先アンケート	3年毎	就職して3年が経過した企業等	学習成果についての設問（DPとの関連を含む）	Web	産業システム創成専攻学務委員会	教育改善およびカリキュラムの見直しのための参考資料とする。

9	学生代表者との意見交換	毎年 1 回	M1/M2	本学への要望・満足度、学習状況	対面又は遠隔により教員と意見交換	産業システム創成専攻長	学生の意見を聴いて、学習支援およびカリキュラムの改善、自己点検・評価に活用。
10	DP に関するアンケート	毎年 1 回	M1/M2	DP の習得状況	Web	産業システム創成専攻学務委員会	個々の学生の学習状況を継続的に把握し、修了までに DP を達成できるよう指導するために活用。
11	修了者への意見聴取	毎年 1 回	修了生 (修了後 5 年後および 10 年後)	愛大学生コンピテンシーの習得状況	Web	産業システム創成専攻学務委員会	教育改善の参考資料として、自己点検・評価に活用。
12	修士論文ループブック	毎年 1 回	M2	修士論文に対する DP の各項目の達成度の評価	ループブック	産業システム創成専攻学務委員会	ループブックを使用して、DP の達成度の評価に活用。

項目			◎ Excellent	○ Good	× Unacceptable
論文審査 100	研究内容 90	25 問題意識 (テーマ設定)	経済・経営の分野における問題意識が明確であり、先行研究を十分踏まえている。テーマ設定の着眼点も独創的である。（25）	先行研究の参照に不十分さは見られるものの、経済・経営の分野での問題意識は明確である。テーマ設定の着眼点も悪くない。（15）	経済・経営の分野における問題意識が曖昧・不明確であり、テーマとして成立していない。先行研究をなんら参照していない。（5）
		10 分析手法等	問題解決のための分析手法等が明示され、適切に活用されている。解決へのアプローチそれ自体に従来にない学際的視点があるなど独自性に優れている。（10）	問題解決のための分析手法等は適切に明示されているが、十分に活用されているとはいえない。分析手法等は概ね妥当と認められる。（6）	問題解決のための分析手法が不明確である。そのため、分析手法等の活用度合いはかたない。（2）
		20 論理展開 文章表現	論理の一貫性があり、飛躍は見られない。卓越した文章表現で、起承転結が極めて明確である。（20）	やや飛躍している箇所があるものの、論理の一貫性がみられ、概ね適切であると言える。（12）	論理の飛躍が多く、論理の一貫性もない。（4）
		10 根拠資料	根拠としての資料が科学的・客観的であり、十分かつ適切に活用されている。（10）	根拠としての資料が十分とはいえない部分、あるいは適切に活用されているとはいえない部分があるが、概ね適切である。（6）	根拠としての資料が不十分、かつ不適切である。（2）
		25 結論の有効性	独創的結論であり、経済・経営の研究に新たな刺激を与えるなど、経済・経営分野の研究に対する貢献が大いに期待できる。（25）	経済・経営の研究に対する貢献が大いに期待できる結論とは言えないが、それなりの期待感はある。（15）	通説の焼き直しであり、独創性に乏しい。経済・経営の研究分野への貢献が期待できない。（5）
	形式 10	5 論述形式の 適切さ	経済・経営の各研究領域の論述形式に則っており、各章における見出し（や図表）がテーマに合致している。	章ごとの見出し（や図表）に不適切な箇所があるものの、経済・経営の各研究領域の論述形式に則っており、概ね適切である。（3）	経済・経営の各研究領域論述形式に則っておらず、見出し（や図表）にかなりの部分不適切な箇所がある。（1）
		5 引用・参照の 明示方法	適切な引用、参照が十分にあり、極めて適切に明示されている。（5）	必要な引用・参照に不十分な箇所、あるいはそれらの明示に不適切な箇所があるものの、概ね適切である。（3）	引用・参照が不十分で、明示も不適切である。（1）
口頭試問 100	プレゼンテーション 50	5 声の大きさ・テンポ等	適切なプレゼンテーションで、とてもわかりやすい。（5）	時折、早口になったりまごつくこともある。（3）	終始、声が小さく聴き取りにくい、あるいは必要以上に騒々しく、テンポや間も悪い。（1）
		5 時間配分	規定時間を有効に活用し、プレゼンテーションを行って、過不足なく終了している。（5）	規定時間を若干超過したり、または余したりしているが、概ね規定時間で行っている。（3）	規定時間をかなり超過している。またはかなり余っている。（1）
		5 熱意	聴衆に訴えかける熱い思いがひしひしと感じられる。（5）	聴衆に訴えかける熱い思いが伝わりにくい部分もあるが、概ね伝わっている。（3）	聴衆に訴えかける思いが感じられない。（1）
		25 主張の明確性と的確性	プレゼンテーションの全体構成から主張・証拠・反論に対する再主張などが適切に行われているなど、論文趣旨が明確で的確である。（25）	論文趣旨の明確さとの確さに物足りなさを感じる、あるいはプレゼンテーションの内容の構成に若干改善の余地がある。（15）	プレゼンテーション内容がわかりにくい。論文趣旨も不明確である。（5）
		10 レジュメなどの適否 (パワーポイント等)	レジュメなどの資料が聞き手の観点から簡潔、かつ要点が整理された形で作成されており、その内容もプレゼンテーションに極めて効果的である。（10）	資料が簡潔すぎて、若干物足りなさがあつたり、逆に資料の情報量が多くて十分活用しているとはいえない部分があるものの、概ね適切である。（6）	レジュメなどが時間をかけずに安易に作成されており、誤字・脱字が目立つ。プレゼンテーションの内容からずれた部分も見受けられ、活用度が低い。（2）
	質疑応答 50	10 態度	質問者に対して、誠実に応答しようとする真摯な態度が十分に受けられる。（10）	質問者に対して、十分とは言えないが誠実に対応しようとしており、概ね適切である。（6）	不真面目な態度、聞き手を不快にする、あるいは威圧するような不適切な態度である。（着きのない態度であったり、イラついた態度であるなど）（2）
		10 質問の理解	質問の意味するところはもちろんのこと、その意図ないし背景も正確に把握している。（10）	その意図ないし背景を十分に理解しているとは言えない部分があるものの、質問の意味内容は理解していると言える。（6）	質問の意図はもちろんのこと、質問それ自体の意味さえ理解できていない。（2）
		30 応答の内容	応答が極めて簡潔かつ的確である。（30）	応答は過不足があるものの、質問に合致しており、概ね適切である。（18）	応答が意味不明であり、質疑応答ができていない。（6）

人文社会科学部研究科（産業システム創成専攻／環境・資源マネジメントコース）アセスメントプラン

1 アセスメントの目的

学生や社会の状況を捉え、データに基づくカリキュラムおよび個々の授業、そして学習支援の改善を継続的に行うことを目的として、学修成果のアセスメントを行う。アセスメントにあたっては、直接評価と間接評価の双方を取り入れる。前者については成績や学籍異動の状況に関するデータを収集し、後者については全学生に対して毎年実施するアンケートを中心にデータを収集する。アンケートについては縦断的な調査を行うことにより、総体としての学生の状況だけでなく個々の学生における能力や学習状況の変化を追跡する。これにより、個々の学生に対する学習支援の改善を行う。さらに、成績評価の結果や学籍異動の状況に関するデータと併せて分析することで、休学・中退や成績不振の予測などへの活用を図る。

2 達成すべき質的水準

達成すべき質的水準は、人文社会科学部研究科産業システム創成専攻のディプロマ・ポリシーにおいて定めている。ディプロマ・ポリシーにおいては、「社会環境や地域資源等のマネジメントに係る高度な専門知識とそれらにおける諸課題の本質を理解する能力」「課題発見力と実践的研究の遂行能力」「コミュニケーション能力とリーダーシップ」「情報分析力・発信力」「新たな価値創造を主体的に導く能力と姿勢」を身につけることを期待している。修士論文においては、「問題意識」「分析手法」「論理展開」「根拠資料」「有効性」「論述形式」等といった基準を満たすものについて合格と判定している。加えて「修士論文ルーブリック」において15の観点のうち全てにおいて、2段階以上（3段階中）に到達することを目標としている。

3 アセスメントの方法

No.	名称	時期・頻度	学年	主な質問項目、内容等	手法	実施責任部署	結果の活用方法
1	修了予定者アンケート	毎年 1-3 月	M2	DP 達成状況、愛大学生コンピテンシーの習得状況	Web アンケート	教育・学生支援機構	教育・学生支援機構が教育学生支援会議に報告し、研究科のカリキュラム改善、学習支援や学習環境の充実、自己点検・評価、情報公開に活用。
2	学期末アンケート	毎年学期末	M1/M2	学習行動、授業・カリキュラム満足度	Web アンケート	産業システム創成専攻学務委員会	専攻の授業方法やカリキュラム改善、学習支援や学習環境の充実、自己点検・評価、情報公開に活用。
3	成績不振学生の調査	毎年 2 回	M1/M2	学業不振の状況 (GPA、修得単位数、休学者数)	修学支援システム	教育・学生支援機構／法文学部および社会共創学部チーム	各研究科が教育学生支援会議に報告し、各専攻の学習支援の改善、カリキュラム改善、自己点検・評価に活用。
4	休退学調査	毎年 1 回	M1/M2	休学者数、退学者数	修学支援システム	教育・学生支援機構／法文学部および社会共創学部チーム	各研究科が教育学生支援会議に報告し、各専攻の学習支援の改善、カリキュラム改善、自己点検・評価に活用。
5	修了者の進路状況	毎年 1 回	M2	修了者の進路 (就職率、県内就職率、進学率)、就職支援への評価	修学支援システム	教育・学生支援機構	教育・学生支援機構が教育学生支援会議に報告し、就職支援の充実、自己点検・評価、情報公開に活用。
6	学修ポートフォリオ (eCrip)	毎年 2 回	M1/M2	各 DP 達成度の自己評価や改善すべき課題	eCrip	産業システム創成専攻学務委員会	eCrip への入力状況や、DP に示されている各分野の達成度を検証し、学習支援およびカリキュラムの改善、自己点検・評価に活用。
7	授業評価アンケート (専攻が指定する科目について実施)	毎年	M1/M2	学習成果についての設問	修学支援システム	産業システム創成専攻学務委員会	教員は学生アンケート結果をフィードバックする。また、授業改善のための参考資料とする。
8	就職先アンケート	3 年毎	就職して 3 年が経過した企業等	学習成果についての設問 (DP との関連を含む)	Web	産業システム創成専攻学務委員会	教育改善およびカリキュラムの見直しのための参考資料とする。

9	学生代表者との意見交換	毎年 1 回	M1/M2	本学への要望・満足度、学習状況	対面又は遠隔により教員と意見交換	産業システム創成専攻長	学生の意見を聴いて、学習支援およびカリキュラムの改善、自己点検・評価に活用。
10	DP に関するアンケート	毎年 1 回	M1/M2	DP の習得状況	Web	産業システム創成専攻学務委員会	個々の学生の学習状況を継続的に把握し、修了までに DP を達成できるよう指導するために活用。
11	修了者への意見聴取	毎年 1 回	修了生 (修了後 5 年後および 10 年後)	愛大学生コンピテンシーの習得状況	Web	産業システム創成専攻学務委員会	教育改善の参考資料として、自己点検・評価に活用。
12	修士論文ループブック	毎年 1 回	M2	修士論文に対する DP の各項目の達成度の評価	ループブック	産業システム創成専攻学務委員会	ループブックを使用して、DP の達成度の評価に活用。

項目			◎ Excellent	○ Good	× Unacceptable
論文審査 100	研究内容 90	25 問題意識 (テーマ設定)	環境・資源の分野における問題意識が明確であり、先行研究を十分踏まえている。テーマ設定の着眼点も独創的である。(25)	先行研究の参照に不十分さは見られるものの、環境・資源の分野での問題意識は明確である。テーマ設定の着眼点も悪くない。(15)	環境・資源の分野における問題意識が曖昧・不明確であり、テーマとして成立していない。先行研究をなんら参照していない。(5)
		10 分析手法等	問題解決のための分析手法等が明示され、適切に活用されている。解決へのアプローチそれ自体に従来にない学際的視点があるなど独自性に優れている。(10)	問題解決のための分析手法等は適切に明示されているが、十分に活用されているとは言い切れない。分析手法等は概ね妥当と認められる。(6)	問題解決のための分析手法が不明確である。そのため、分析手法等の活用度合いもはかれない。(2)
		20 論理展開 文章表現	論理の一貫性があり、飛躍は見られない。卓越した文章表現で、起承転結が極めて明確である。(20)	やや飛躍している箇所があるものの、論理の一貫性がみられ、概ね適切であると言える。(12)	論理の飛躍が多く、論理の一貫性もない。(4)
		10 根拠資料	根拠としての資料が科学的・客観的であり、十分かつ適切に活用されている。(10)	根拠としての資料が十分とはいえない部分、あるいは適切に活用されているとはいえない部分があるが、概ね適切である。(6)	根拠としての資料が不十分、かつ不適切である。(2)
		25 結論の有効性	独創的結論であり、環境・資源の研究に新たな刺激を与えるなど、環境・資源分野の研究に対する貢献が大いに期待できる。(25)	環境・資源の研究に対する貢献が大いに期待できる結論とは言えないが、それなりの期待感はある。(15)	通説の焼き直しであり、独創性に乏しい。環境・資源の研究分野への貢献が期待できない。(5)
	形式 10	5 論述形式の 適切さ	環境・資源の各研究領域の論述形式に則っており、各章における見出し(や図表)がテーマに合致している。	章ごとの見出し(や図表)に不適切な箇所があるものの、環境・資源の各研究領域の論述形式に則っており、概ね適切である。(3)	環境・資源の各研究領域論述形式に則っておらず、見出し(や図表)にかなりの部分不適切な箇所がある。(1)
		5 引用・参照の 明示方法	適切な引用、参照が十分にあり、極めて適切に明示されている。(5)	必要な引用・参照に不十分な箇所、あるいはそれらの明示に不適切な箇所があるものの、概ね適切である。(3)	引用・参照が不十分で、明示も不適切である。(1)
口頭試問 100	プレゼンテーション 50	5 声の大きさ・テンポ等	声の大きさが適切で、テンポや間もよくて、とてもわかりやすい。(5)	時折、早口になったりまごつくこともある。(3)	終始、声が小さく聴き取りにくい、あるいは必要以上に騒々しく、テンポや間も悪い。(1)
		5 時間配分	規定時間を有効に活用し、プレゼンテーションを行っていて、過不足なく終了している。(5)	規定時間を若干超過したり、または余したりしているが、概ね規定時間で行っている。(3)	規定時間をかなり超過している。またはかなり余っている。(1)
		5 熱意	聞き手の目を見て話すなど、人の心に訴えかける熱い思いがひしひしと感じられる。(5)	人の心に訴えかける熱い思いが伝わりにくい部分もあるが、概ね伝わっている。(3)	人の心に訴えかける思いが感じられない。(1)
		25 主張の明確性と的確性	プレゼンテーションの全体構成から主張・証拠・反論に対する再主張などが適切に行われているなど、論文趣旨が明確で的確である。(25)	論文趣旨の明確さと的確さに物足りなさを感じる、あるいはプレゼンテーションの内容の構成に若干改善の余地がある。(15)	プレゼンテーション内容がわかりにくい。論文趣旨も不明確である。(5)
		10 レジュメなどの適否(パワーポイント等)	レジュメなどの資料が聞き手の観点から簡潔、かつ要点が整理された形で作成されており、その内容もプレゼンテーションに極めて効果的である。(10)	資料が簡潔すぎて、若干物足りなさがあったり、逆に資料の情報量が多くて十分活用しているとはいえない部分があるものの、概ね適切である。(6)	レジュメなどが時間をかけずに安易に作成されており、誤字・脱字が目立つ。プレゼンテーションの内容からずれた部分も見受けられ、活用度が低い。(2)
	質疑応答 50	10 態度	質問者に対して、誠実に応答しようとする真摯な態度が十分に見受けられる。(10)	質問者に対して、十分とは言えないが誠実に対応しようとしており、概ね適切である。(6)	不真面目な態度、聞き手を不快にする、あるいは威圧するような不適切な態度である。(落着きのない態度であったり、イラついた態度であるなど)(2)
		10 質問の理解	質問の意味するところはもちろんのこと、その意図ないし背景も正確に把握している。(10)	その意図ないし背景を十分に理解しているとは言えない部分があるものの、質問の意味内容は理解していると言える。(6)	質問の意図はもちろんのこと、質問それ自体の意味さえ理解できていない。(2)
		30 応答の内容	応答が極めて簡潔かつ的確である。(30)	応答は過不足があるものの、質問に合致しており、概ね適切である。(18)	応答が意味不明であり、質疑応答ができていない。(6)